

平和国家の理念と齟齬をきたす 元「日本人」の声の聴き方

高江洲 昌 哉

1：はじめに

現代史Bは、未完の戦争処理の問題、または、戦争に関する「記憶の継承」について考えることを目的とした授業を実践してきた。戦後処理と記憶の継承問題の両方に関わるということで、酒井充子監督による「台湾人生」(2008年)というドキュメンタリー映画を、この科目を担当した当初から使用してきた。「台湾人生」を利用したのは上映時間が85分のため、90分授業に対応できること。また、監督の編集が入っているとはいえ、同一人物でも日本への思いの揺れ幅も描かれており、1つの映画で複数の声が聞こえ、親日／反日という単純な区分ができないことを知ることができるというメリットからであった。

後者は利点でもあるが欠点でもある。植民地の歴史や台湾の近現代史が分からないと、映画の中での発言を理解するには骨が折れる内容になっている。おそらく「台湾人生」を教材としてどのように使うのか、分類をすれば、Ⅰ型(補足説明を加えて断片的取り扱い)と、Ⅱ型(全編通しでみせる)になるであろう。またⅡ型の場合はどの程度、事前説明をするのかでも教員は悩むと思う。ちなみに筆者は、この映画の鑑賞を事前説明なしの全編通しを、コロナ下のオンライン授業時を除き、これまで続けてきた。では、なぜ、事前説明なしで全編通しの上映をしてきたのかと言えば、1点目の理由は、教師の見せたい情報だけを見せる“恣意性”を排除するためであった。2点目の理由は、事前説明をしないことで、学生がああ映画のどの部分に興味を持つのか、学生の素直な反応をみることができるという理由からであった。

コロナ前の授業では、「台湾人生」を視聴したあとに、学生の感想文を紹介

しながら、反応が多かった部分の補足説明と、台湾の近現代史を紹介するという授業をおこなってきた。ただし、授業を繰り返すうちに、きちんと取り扱わないといけないと感じながら、正面に据えてこなかったテーマへの対応について、苦慮の思いを強めるようになった。この対応に苦慮した課題とは、「私たちは日本人である」という声や、ひどい目にあったけど戦争に協力する愛国心をどう教えるかということであった¹。

オンライン授業中はできなかったビデオ鑑賞が復活した2022年度と2023年度は、「台湾人生」をみせたあと、感想文を書くという流れをとらず、授業で「台湾人生」をみせたあと、次の授業で「東アジア現代史をどう理解するか？」「台湾人生」を踏まえて」をおこなってきた。とくに2023年度は、授業の後に「『皇民化世代』の声を聴く」というテーマで考えたことを600字から800字程度にまとめてください」という課題を出した。

本稿は、この課題の回答を中心にまとめたものである。もう少しで戦後80年を迎えるが、戦争や植民地支配の歴史も「自分たちとは関係のない」と思う意識がより濃厚になった。継承問題がマスコミを中心に喧しいが、2000年代に生まれた学生たちが、従来、植民地支配や戦争問題では見落とされがちであ

¹ 2000年代に漫画家小林よしのりが日本語世代の声を「引用」しつつ、植民地統治を肯定する『台湾論』を出版した。こうした台湾の日本統治を肯定する小林『台湾論』を「ある特定の「日本人」にとって心地よい側面ばかり」のものであり、「小林氏のやり方は、あまりに恥知らずなもの」と評価する人々が集って、東アジア文史哲ネットワーク編『〈小林よしのり『台湾論』〉を超えて』（作品社、2001年）が出版された（以下、『超えて』と略記）。『超えて』収録の駒込武「自己肯定の「物語」を超えて」は、日本語世代の複雑な屈折について言及している。本論は、授業で「日本語世代の複雑な屈折」を説明し、学生が「日本語世代の複雑な屈折があることが分かりました」とオウム返しの回答をしない、能動的な理解を目指した実践といえる。ここでいう「オウム返し」いわゆる無難な「模範解答」を回避する実践については、拙稿「戦争体験をどのように引き継ぎ、主体的に考えるか」（『青山スタンダード』14号、2019年）、「現代史の授業で「不適切な感情」をどのように扱うか」（『青山スタンダード』16号、2021年）などを参照のこと。

ちなみに、『台湾論』以降の日本語世代に関する考察として、中村平「台湾先住民を日本人にさせる殖民暴力とその傷跡の分有—日本のおかげと恩という語りとの出会い」（坪井秀人編『戦後日本の傷跡』、臨川書店、2022年）などがある。

った「大東亜戦争」を支持するような発言をする植民地生まれの日本語世代の声を聴いて、どのように「理解／継承」を考えたのかを提示することで、戦争経験の継承を考える一助にしたいと思う²。

2：出題の経緯

「台湾人生」の中では、男に生まれていたら特攻に志願したという陳清香（1926年生）や、愛国心で盲目になっていた社会状況や差別からの脱却も夢見て志願したと話す蕭錦文（1926年生）という人物も出てくる。もちろん、陳や蕭も差別経験を話しているが、愛国心にもえ、「日本人以上に日本人になる」ことに熱心であった。これは、ドキュメンタリー映画に登場する他の3人にも共通する。ただし、楊足妹は小学校もきちんと卒業していないので、この点、他の4人に比べて日本語世代ではあるが、皇国臣民の価値観を身に着けたかどうかは疑問が残る。ちなみに、先行研究などは、1920年代生まれの流暢に日本語を話す世代を主に日本語世代という表記を使用しているが、本稿では、この日本語世代を、徹底的に日本語を習得しているが、日本語の修得だけでなく、天皇への忠誠心の涵養も重視する皇民化教育のもとで育ったことを勘案して、皇民化世代³を使用している。

ちなみに、「台湾人生」鑑賞後の授業では、こうした発言の補足資料として、

² 授業では戦争継承の問題を考える前提として、北原糸子が「東京府における明治天皇聖蹟指定と解除の歴史」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第121集、2005年、287頁）で述べている、下記の指摘を紹介している。

「戦後刊行される多くの地方自治体史には、明治天皇聖蹟の所在について論及するものが少ない。戦前の天皇制イデオロギーによる国民強化^{（皇民化）}のシンボリックな事例として、否定されるべき対象という位置づけであることは理解できるが、歴史上なかったことにするかのような叙述のあり方には、歴史認識の客観性という視点から、問題を感じる。否定されるべき歴史であっても、史実としての事実は記録しておくべきだと考える。そのことが自国の歴史に向き合う基本的な姿勢ではないだろうか」。否定すべきものであっても、無かったことにしない。本稿で取り上げる課題もこうした取り組みの一例といえる。

³ 日本語世代と対比して使っており、なおかつ分析用語であるため、カッコを付けたほうが良いが、本稿では煩雑さを避けるため、カッコを付けていない。

対照的な人物を扱った二つの作品を紹介している。一つは加藤邦彦『一視同仁の果て』（勁草書房、1979年）であり、もう一つは、鄭春河『台湾人元志願兵の大東亜戦争』（以下、『台湾人元志願兵』と略記、展転社、1998年）である⁴。『一視同仁の果て』は、日本人ジャーナリストによる軍属として悲惨な経験をした皇民化政策下を生きた台湾人の声を集めたものであり、日本の戦争や植民地支配を批判するという性格の本である。もう1冊の『台湾人元志願兵』は、著者の鄭春河は、早稲田大学中学部（校外生）卒業という学歴を有しており、なおかつ、志願兵経験もある人物による評論集である。この本は、大野俊康を代表とする「鄭春河先生著書刊行会」によって出版されたものである⁵。『台湾人元志願兵』の立ち位置は大東亜戦争を「聖戦」と捉えるように『一視同仁の果て』とは真逆の大東亜戦争肯定論である。

筆者が『一視同仁の果て』を授業で利用している部分は、霧社出身で、父親が霧社事件で日本人に殺されたアウイ（1925年生）へのインタビューの箇所である。ここで加藤は「日本精神」を連呼するアウイの言動を通して、「私は妙な納得をしなけりばならなかった。それは支配者日本がかれらに教えたことはこれだけだったのだ。これ以上のことでもなければ、これ以下のものでもない。…これだけのことを教えておけば事足りたのだ。頑はない子供たちに、暴力的な価値観の転換を押しつけて、ただ皇国史観のみを叩き込んでゆく。やり切れない思いで、私はこのことに関する質問を打切った」⁶とある。

もう一方の『台湾人元志願兵』で紹介している箇所は、自身を「正しい日本の教育を受けて、千載一遇の大東亜戦争にも参加出来た。…「尽忠報国」の精神と国民道徳を今もなほ身につけてゐる。これにまさる幸せがあらうか」⁷と、

⁴ 授業では、アウイの時に出る霧社事件を含め、台湾でも抗日運動があったことや、戦後の作品であるが、呉濁流の『アジアの孤児』（岩波現代文庫、2022年）などを使って皇民化世代が語る日本統治時代との違いを紹介している。

⁵ 同書あとがきによると、私財を投じて日本人へ「大東亜戦争における日本の正義を主張」する冊子を発行してきた鄭の行為に賛同した人々が刊行会を結成して、この本を発行したことがわかる。

⁶ 『一視同仁の果て』（135頁）。

⁷ 『台湾人元志願兵と大東亜戦争』（7頁～8頁）。

大日本帝国時代の自身を肯定している自己紹介の部分と、どういう経緯かは不明だが、彼を訪問した大学生らに教育勅語を説明し、日本精神の復活を願い、「一番哀れなのは戦後の亡国教育を受けた日本国民である」⁸（449頁）と、国土防衛心を喪失した戦後の日本人を憐れんでいる部分である。

戦後日本においては、植民地支配や戦争を肯定する人たちと、植民地支配や戦争を批判・反省する人たちに分かれてきた。後者の姿勢は、「平和国家日本」の「公式」の立ち位置といえる。ただし、戦後民主主義を擁護する立場からは、鄭の発言を聴くことは難しく、もっぱら前者（大東亜戦争肯定論者）が引き取ってきたと言える（実際、出版社も展転社である）。そのため、戦争肯定の発言は、植民地主義を批判するというヒューマニズムで聞くことが難しく、「あの戦争は悪くなかった」と思っている日本人が、鄭のような皇民化世代の発言を無批判で聞いてくれる状況であった（日本「免罪」ができるので「政治利用」の側面は無視できない。ただし、少なくとも、鄭にとって自分の存在を認める人たちといえる）。

鄭の発言を踏まえて、アウイのインタビュー記事に戻ると、アウイ自身は自分で語る能力が少し弱かったため、加藤が心情を代読する構成になっている。そのため、アウイと鄭とは、自分で語ることができない／できるという違いという構造になっている。そうすると、語彙力があれば、アウイも鄭のように自身を語っていたかもしれない。このような予測も成り立つ。もちろん、その逆に、日本を批判する立場もありうると、授業では説明をした。

さて、先ほど「課題」と書いたように、「皇民化」された人たちの戦時期の経験と、その後の人生などは大事な話であるが、これらの話は90分授業のうち、数分を使う程度であった。今回、しっかり向き合おうと考えたのは、レオ・チン『反日』（人文書院、2021年）、呉叡仁『台湾、あるいは孤立無援の島』の思想』（みすず書房、2021年）の刊行が大きく寄与している。なぜならば、この2冊でも元皇国国民のことが扱われていたからである。授業では、この2

⁸ 前掲『台湾人元志願兵と大東亜戦争』（449頁）。

冊の本を紹介しながら、以下のように授業を進めた。

呉の本で皇民化世代は、「6 反記憶政治論」で扱っている。呉は「『親日』感情を虚偽意識として理解するのは、それほど珍しいことではないかもしれない」としつつ、「そのように批判する者たちは、台湾人の一世代前の人々の遭遇した経験を高みから「批判」する立場で厳格な道徳的尺度を設ける一方で、彼らの経験の具体的な内容には立ち回らない」と、理解の対象ではなく批判の対象に限定することや、「年配者を「他者化」する向き合い方に疑問を呈している。そのため、呉は「かくも複雑な歴史の経験に向かい合う時、共感を欠けば理解することは難しい」⁹と、「共感」の必要性を述べている。

呉の文章を紹介して、台湾でも「難問」（取り扱いに苦慮している）として存在していると説明した。

次のレオ・チンの『反日』で皇民化世代を扱っているのは、第4章「植民地時代のノスタルジー——またはポストコロニアル時代の不安」である。レオは、日本の桜の花出版から刊行された台湾の日本語世代の本を考察の対象にしている。そして、日本語世代のノスタルジーをどう理解するかという問いに対し「取るに足らない者たちによるつかみどころのない幻想と判断することには反対したい」¹⁰と述べ、さらに「日本が残した遺産のために国民党に抑圧され、彼らは家族や友人と家の中でしか自分自身の気持ちを表明できなかった」¹¹と、彼／彼女らの戦後の環境に配慮をしている。また、懐古趣味的な日本人読者層に「簡単に取り込んでしまえるものではない」¹²としながらも、彼／彼女らの発言の背後にある承認要求に注目し、日本人の忘却により「時代は彼らの味方ではない」¹³という結論になっている。

⁹ 『台湾、あるいは孤立無援の島の思想』（145頁～146頁）。

¹⁰ 『反日』（142頁）。もっとも、レオ・チンは「『彼らのノスタルジー言説を、植民地支配からの解放、そして、最終的には建国へと続く直線的な歴史観から抜け出ようとする動きとして理解しなければならないと主張したい』（148頁）」と、独立言説に接ぎ木されることを拒否しているような文も入り込んでいる。

¹¹ 前掲『反日』（164頁）

¹² 前掲『反日』（152頁）

¹³ 前掲『反日』（166頁）。

レオは、日本の植民地主義に対する真摯な反省を求める立場である。そのため、呉と比較して、レオの文章を読むと、積極的に彼／彼女らの声を聴こうという態度がみられない。よって(1)「皇民化」を肯定する声を組み込めず排除の対象としている点では、国民党政権とポストコロニアルも同じではないのかという疑問を抱かせる分析になっている。こうした、(2)当事者の声を評価選別するような行為は、専門家の立場からしているのかもしれないが、自分の都合の良い声を聴いているようである。それは、皇民化世代から日本に都合の良い部分を抜き出した小林よしのりと同じではないかという疑問がでてる¹⁴。

レオはポストコロニアルの学者であるため、日本の植民地主義を批判する視角は鋭いが、その分、皇民化世代への内面的考察の深みが弱いような印象を感じる。ポストコロニアルの立場から植民地支配肯定の声を、植民地主義の延命ではない形で、どのように受け止めるのかという考察があっても良からう。先ほど書いたように、排除するだけなら、国民党政権と同じではないかという疑問はぬぐえない。皇民化世代の声を聴くことは「植民地主義」の延命に利用されるだけなのか。鄭春河のような人物を単なる犠牲者の立場におかず（彼も日本の植民地主義の犠牲者と言われると反発するであろう）、鄭の発言を尊重しつつ、植民地主義を批判（反省）するための声として聴くためにはどのようにすればよいのであろうか。

こうした「政治利用／切り捨て」するような皇民化世代の声の聴き方を批判

¹⁴ 前出の駒込は、日本語世代である蔡焜燦に会った思い出を述べている箇所、彼への向き合い方について、「その複雑な屈折は、日本人にある種の居心地の悪さを感じさせる。実際、私自身も、台北で蔡焜燦氏に美味しい台湾料理をご馳走になりながら、話の内容にはある種の居心地の悪さを感じざるを得なかったことがある。自分にできることがあるとすれば、相手の話を拒絶するのではなく、その居心地の悪さを自分の物語に解消してしまうのでもなく、戸惑いながら立ちつくすことだろう」（32頁）と述べている。おそらく、ポストコロニアルを標ぼうすれば、この「戸惑いながら立ちつくす」という行為を理論的に考察し、共有化を深めていく知的実践になるであろう。本授業は特段「ポストコロニアル」理論を学ぶ場所ではなく、資料を読みながら、戦時期の植民地社会に生きた人々をどう理解するかということを主眼にしている。

する前提には、大日本帝国の皇民化政策は、日本人化（皇民化、忠良な臣民へ）を徹底し、戦後の国民党政権も、中国化を急ぎ、中華化を徹底してきた（日本精神は奴隷精神として、その精神の除去）という、人間の価値観を「簡単に／徹底的」に入れ替えようとした共通点が見受けられるからである。もちろん、尊重しながら批判するという読み方は、素直な読みではないという批判もある。ただし、「屈折した心情」を理解し継承していくためには、尊重しながら「ずらす」読み方も一案としてあるかもしれない。この点は、批判を受けながら修正していく必要があり、今後の課題として記しておきたい。

このように読み方の留意点はあるが、この問題をあえて取り上げた大きな理由は、皇民化世代の人たちが、自分たちの声を聴いてほしいと願っている相手は、もちろん、台湾の人もそうかもしれないが、日本人に向けられているのではないかと考えたからである。そのため、支配した側の子孫として「利用」と「忘却」とは違う態度で、どのように声を聴けばいいのかを考えたい。そこで、真正面に「どう聴けばいいか」という課題を出して、学生と一緒に考えることにした、以上が授業実践と課題に至る経緯である。

3：学生の回答から

それでは、どのような意見があったのか、授業で使用した回答を紹介したい。

まず出発点として、「当事者たちの目線」を理解しようという回答 A と、「当事者」を「弱者」（支配されたという意味での弱者であろう。もっとも、弱者という位置付けももろ刃の刃である）とした回答 B を紹介して、視点の多角化（日本人から台湾人への移動）を示した。

回答 A

台湾が日本に対して友好的というのは自分でも常日頃耳にしていた。だがなぜそんなにも台湾が親日的なのかは考えたことがなかった。今回の講義を通して受験時代に学んだ日本史を思い出した。第二次近衛文磨政権下において皇民化政策がとられ台湾では日本語の徹底教育、改姓名、徴兵制

の導入などが行われた。その出来事を踏まえ、現在の台湾の親日感情を評価するのはやはり難しいことであると感じた。単に可哀そうだったと犠牲者の立場にして考える事を放棄するのは簡単だ。だが逆に親日感情を虚構であるとし、台湾の人々の経験を否定することも間違っていると私も考えた。やはり、第三者目線で事実を列挙して語るのではなく当事者たちの目線に立って理解しようとする試みが大事なのであると再認識した。

回答 B

歴史を勉強していくにあたって、「弱者の側に立って考える」ことを重要視することが特に義務教育の期間中みられた気がするがそれだけではなく自分と同じ人間がその歴史的事象の当事者であるということを再認識させられた

先ほど、「弱者」という位置付けに留意するよう書いたが、授業では「現代史における経験者は、資料なのか、それとも人間なのか」と、歴史理解はあたかも用語集で用語を覚えるような感もあるが、現代史では、生きている当事者もいるので、他者理解でもある旨を再度確認した。そして、結論になるような「共有したいゴール」として、次の回答を提示した。

回答 C-1

「皇民化世代」の声を聞くというテーマのもと、講義内ではそれぞれ異なる立場からの皇民化に関する思想を学んだ。その中で私が感じたことは「歴史的事実はひとつしかないが、真実はその人の数だけある」ということである。中学や高校で習う歴史年表のように単純に歴史の中で起きたことを理解することは簡単だ。なぜなら、どれほど歴史が複雑であろうと、事実の一つだけだからだ。しかし、真実は簡単に善悪を定められるほど単純ではない。同じ事実を見ても、その事実に対する考え方や見方は人それぞれであり、立場が違えば善も悪になってしまう。

回答 C-2

正直、これまでは、植民地と聞けば、なんとなく自国の領土を広げるために、土地を奪ったくらいの感覚であったが、このように、植民地にされてしまった側の視点に立つとこれまでとは見え方がガラッと変わって、当たり前前に自国民として生きることが難しかったという点、そして自分は、そのようなことを押し付けてきた側の国に住んでいるという点を改めて意識させられた。

歴史認識の話に戻すと次のような注意喚起にもなる。まずはフラット（多様を同列）に把握することへの危惧する意見（D-1）がある。

回答 D-1

日本による台湾統治は良かったか悪かったかという議論は甚だナンセンスであり一概に決めることではないと強く感じた。…略…このような経験から確かに「歴史の声は多重音声」であるがみんながばらばらに均一に異なるとらえ方をするのではなく、そこには多数派のとらえ方と少数派のとらえ方が存在するのだと感じた。

または、「愛国」を叫んでも、本国と植民地という背景の違いに気を付けたほうが良いという意見（D-2）もあった。

回答 D-2

しかし、彼らのバックグラウンドを考えると、純日本国民が言う「国のため」と彼らの言う「国のため」には必ず意味の違いがあり、同質のものと考えるはいけない。

もともと日本に住んでいた人々と突然日本に支配されるようになった人々とは、いずれも主人が天皇であるけれど、その背景に違いがある。果たして皆一同に真の皇民だったのか。日本に生まれた人々でさえ天皇に

忠誠を誓っていたのかわからないのだから。

そんな彼らの想いを比較することで、皇民化世代の様々な人々の言葉をより偏見なしに見ることができないのではないか。まずは異なる様々なバックグラウンドを明らかにする。そこから始めないと、複雑で多様な想いを同質なものとして捉えてしまう危険性がある

もちろん、この課題は簡単にきれいにわかるものではない。そのため、正直に書くと、あまりにも複雑すぎて、把握や認識することが難しいという意見(E)¹⁵になる。

回答E

講義や「台湾人生」を観た後に、言葉では上手く表せないような心にわだかまりが残った。きっと私たち日本人にとって、台湾の人々が日本の植民地時代、および日本の皇民化政策に対して純粋な憎しみの気持ちを抱いていた方がありがたかった(表現としてベストではないような気もするが)と思う。仮に純粋な憎しみであれば、謝罪し、贖罪することができるからだ。しかし、皇民化政策を受けた人々は今でも日本の軍歌を歌い、日本語で古い友人と談笑している。皇民化政策によってアイデンティティを失われた憎しみよりも、戦後日本に見捨てられたという哀しみの方が大きいように感じる(その後の国民党統治も関係している)。勿論日本が戦時中台湾に対して行ったことは許されることではない。しかし、よくも悪くも皇民化政策、教育は当時の台湾の人々に強く残っている。私はそんな台湾の人々に対して、どう接すればいいのか分からない。

日本人にとっても首相の靖国神社参拝はたびたび議論になる。私自身、

¹⁵ こうした「理解するのが難しい」という回答は一定数あるので、聴きようによっては、出題した課題の全否定になるかもしれないが、コメントの際に「台湾人生」に出演した陳清香が自身の心境を「解けない数字」と述べているように、本人もうまく理解し、説明できないものを、時代も環境も違う人間が簡単に理解できると思う方がおかしいし、教員も「正解」を知っているわけではないと述べている。

この国の存続のために戦った人たちを偲ぶことになぜ他国が口出ししてくるのか理解できない。台湾の人々にとっても靖国神社参拝は大きな意味を持っている。日本のために戦い、戦場で散っていった台湾の人々をも偲ぶことになるからだ。戦争の肯定ではなく、戦争で亡くなった人々に対して弔意を表すことであることは言うまでもない。改めて靖国神社への参拝がどんな意味を持つのか、考えさせられた。「皇民化」がどんなものであったかを学んでも、皇民化世代がそれに対してどう感じ、どう生きてきたのかを知る機会のはめつたにない。歴史の授業で語られない人々の声を聴くこと、それが正しい「歴史を学ぶ」ということではないだろうか。

4: まとめ

以上、簡単ながら回答を通して、皇民化世代の声を聴こうとする学生の実践を紹介してきた。筆者が受け持っている現代史の授業では、戦争の歴史の継承について考えているが、「君たちはボイスレコーダーではない」と、ある特定の体験に特化し、その体験者の経験を一言一句、正確に伝えるような継承とは一線を画し、様々な事象を学ぶことで新しい立場に即した継承について考えることを意識しておこなってきた。「聴きたい声」だけを聴くわけではなく、「歴史の声は音声多重」であり、それを聞き取るにはどうすればよいか、本稿はこうした目的に即した課題への回答の一例である。ちなみに、音声多重といっても、それはフラットではない。授業では、この点を明示することなく話していた。そのため、本課題の回答ではないが、慰霊碑を探すレポートの中である学生が、下記のような回答を出して、声の力学を見つける意見があったので、最後に紹介したい。

回答 F

私は冒頭で物質的なメディアはどんな声を現代に届けているかという点に興味がありこの場所（表参道の山の手空襲慰霊碑…引用者補記）を訪れましたが、実際のところ声を聞いてもらえない場合があることも理解する

ことができました。

授業の中で「歴史の声は音声多重」である事を学びましたが、それに加えて私は聞き手の耳も十人十色だと考えます。例えば戦争の記憶が社会全体で均一に共有されることはなく、同じ共同体や社会集団の中でも認識は細かく枝分かれしています。戦争を屈辱的・トラウマチックな記憶だとみなし放棄する人々もいれば、そもそも知らない人もいるでしょう。山の手空襲の慰霊碑は空襲が絶対にあったという過去を指すものであり、記憶を固定化、伝承するために建立されました。しかし、それを見た人々が過去の記憶から何を汲み上げるかは、人それぞれ異なるのです。

教員が提示したことを「オウム返し」するのではなく、自分なりに咀嚼し、今度は「聞き手の耳も十人十色」と新しい視点を提示している。相対化の危うさがあることも承知しているが、自分を絶対化しないような作業を繰り返すことで、皇民化世代の声も「政治利用」ではなく、「歴史的な遺産」として継承されるのではないだろうか。